

小規模多機能ホームきなっせ

呆けても障害を持っても
地域の中で普通に
生きられるために

きなっせは宅老所型多機能ホーム

- 通って デイサービス
 - 泊まって ショートステイ
 - 出かけて ホームヘルプ
 - 住める グループホーム
 - ケアマネージメント
 - 緊急 レスパイト
 - ボランティア育成、地域づくり
-

きなっせのホーム(拠点)

- 小規模多機能ホーム きなっせ
- きなっせきなっせ
- 緊急避難ホーム おいでなっせ
- コレクティブホーム いつでんどこでん

本年3月開設

地域サポートセンター

子供からお年寄りまでのデイホーム

住まい、等

きなっせの利用者

- 通い 17名 一日10名
- 泊まり 定期的2名 自宅ときなっせ半々
不定期 3名
- 住い 7名+5名
- 緊急避難ホーム 1~5名
- 出向いて 訪問介護 12名

どれだけ重度でも(要介護度の平均4.2)でも
地域での生活は可能

いつでもどこでんのサービス

- 地域サポートセンター
- デイサービスセンター
(介護保険指定、非指定=子供から老人まで)
- ホームヘルプ
(介護保険、支援費、NPO独自)
- 泊まり
- 住い(痴呆の人用、障がい者用)
- その他(食堂、配食、サロン、等)

参考資料

一人一人の在宅での暮らしを支える宅老所・小規模多機能ホーム

- 事例1 自宅ときなっせ半々の生活
- 事例2 地域から弾き出される
痴呆の人

地域の意識を変える必要

- 自宅での生活を支える 24時間365日 いつでも必要なときの ホームヘルプとデイサービスを核としたサービス

だが、

- 「本人・家族の望み」とかけ離れた、病院・施設へ弾き出す地域の意識
 - 地域で暮らすために必要な本人・家族の安心感
 - 地域の人たちの安心(安全)感
-

利用者・家族に安心を与える 地域の中の小規模多機能ホーム

- 24時間365日いつでも頼れるところがあることが、病院・施設入所にならない
 - おいでなっせの2年間で延べ15件のうち自宅へ帰れたのは半数以上(8件)、施設入所になったのは1件
あとは、グループホーム入居
 - 家族は、無理しないで在宅介護も続けられる
 - その存在だけでも安心
-

家庭的で、小規模で、多機能

- 小規模多機能とは、ニーズに即応すること
 - 単にサービスが多くあることではなく、生活を24時間継続して支えていること
 - そのケアは
 - 利用者継続したケアが提供できること
(デイ・泊まり・ホームヘルパーが同一の介護者)
 - 利用者のところに寄り添うケア(ケアの質の転換)
 - コミュニケーションを大事にした、喜怒哀楽を一緒にできる関係
-

地域で継続した普通の生活を

- 縦割りでなく地域で支える仕組みを
 - 小学校区に1ヶ所の小規模多機能ホームを
 - レスパイト機能が不可欠
 - 一人の利用者の24時間365日の生活を支える仕組み
 - これまでの施設にかわる安心感を創り出すことが必要
 - これが「特別のこと」ではなくなるように
-



高齢者・障害者支える 小規模多機能ケア

山鹿市にホーム開所

「通所」「宿泊」「居住」「ホームヘルプ」のサービスを一体的に提供する小規模多機能ケア。「廻りや障害があっても地域の中で普通に暮らし続ける」ことを支援するとして、全国的に広がりつつある。県内では3月下旬、本格的な小規模多機能ホームが山鹿市にオープン。県も本年度、同様のケアを牛深市で始める。国も関心を示しており、昨年末に研究委員会を発足。2年後の介護保険制度改正に向け、検証を始めた。

環境変えず地域で生活

通所、宿泊、居住、ホームヘルプ…一体的に提供

山鹿市の小規模多機能ホーム「ひまわり」は、NPO法人「こころのケア」(川原秀美理事長)の4番目の施設。「こころのケア」は、1999年(平成11年)から「通所」「泊まり」のサービスを提供する。県内では、山鹿市に「ひまわり」が開設された。県内では、山鹿市に「ひまわり」が開設された。県内では、山鹿市に「ひまわり」が開設された。

「変化に弱い」高齢者のお年寄りは、環境の変化に弱い。現行制度では、介護保険制度(介護保険)のサービスが、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。

「変化に弱い」高齢者のお年寄りは、環境の変化に弱い。現行制度では、介護保険制度(介護保険)のサービスが、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。

職員と一緒に洗濯物を運んだり、掃除をしたり、食後の片付けを済ませたり、通所するお年寄りの山鹿市の「ひまわり」

手。現行制度の問題に「在宅から通所、一時宿泊、グループホーム入居」にいたる環境の連続性」を挙げ、解決する手法として小規模多機能ケアに注目している。本年度中に調査報告書を作成する予定だ。

山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。山鹿市は、高齢者の生活に支障をきたしている。

地域に開かれたホームを

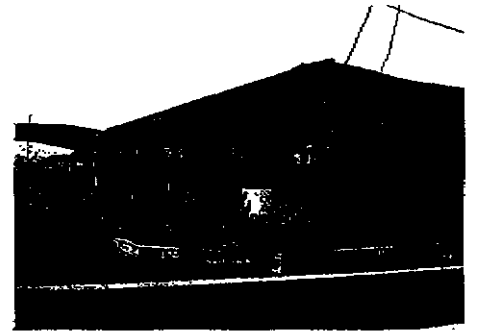
きなっせの新しい小規模多機能ホーム（以下新ホーム）は、熊本県の北部、山鹿市の中心部から車で5分ほどの住宅街に建てられる。960坪の土地に、「多目的ホーム」と「デイサービスセンターとグループホーム（自主事業）の合築施設」の2つの建物がつくられる。

図1は敷地全体の平面図である。多目的ホームと合築施設のあいだは、散歩道になっていて、一般の人が通り抜けられるようになっている。多目的ホームの横には菜園スペースがある。その隣の広場は子供の遊び場にする計画だ。敷地の中に、わざわざ散歩道や子供の遊び場をつくるのは、空間的に地域に開かれたホームにするためである。近くに小学校があり、遊び場に子供たちが遊びにきてくれたらと考えている。

図2は多目的ホームの平面図。部屋は全部で9室。各部屋は約6畳分の居間とトイレと押入れからなる。共同の居間兼食堂があり、家賃は1ヵ月3万円。共同の食堂の横には事務室があり、24時間常駐の管理人を置く予定だ。多目的ホームの入居者は、障害を持った人たちや高齢者などを想定している。

図3はデイサービスセンターとグループホーム（自主事業）の合築施設。自主事業分のグループホームは9部屋。各部屋6畳分の居間と押入れからなっている。

デイサービスセンターは、定員10人。2つの居間と食堂からなる。ここでは「富山型」と呼ばれる障害を持った人たちや子供たちも



きなっせ



おいでなっせ



きなっせきなっせ

デイサービスに併設した宿泊施設で在宅生活を支える 新設型の最新モデル

平成二年四月の開業当初から「きなっせ」では「通って泊まれて、家にも来てくれて、いざとなつたら住むこともできる」小規模多機能ケアを行ってきた。きなっせに続いて平成二年六月には、「きなっせきなっせ」を開業。平成三年六月には、「おいでなっせ」をオープン。この三月には、新しい小規模多機能ホームを開く。今回紹介する新しい小規模多機能ホームは、ソフトはもちろんだこと、ハードとして新設型の小規模多機能ホームのモデルになるのではないかと思われる。



おいでなっせに来た子どもを抱いて喜ぶお年寄り。

熊本県熊本市
NPO法人コレクティブ きなっせ
先進事例1

図1 新ホーム平面図

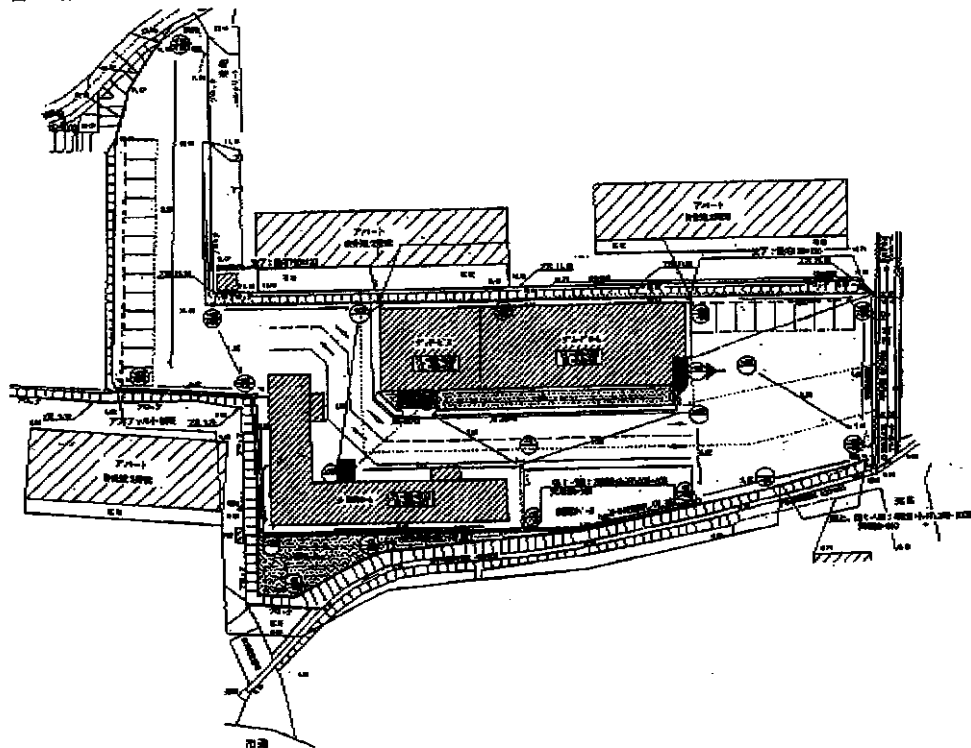


図2 多目的ホーム平面図

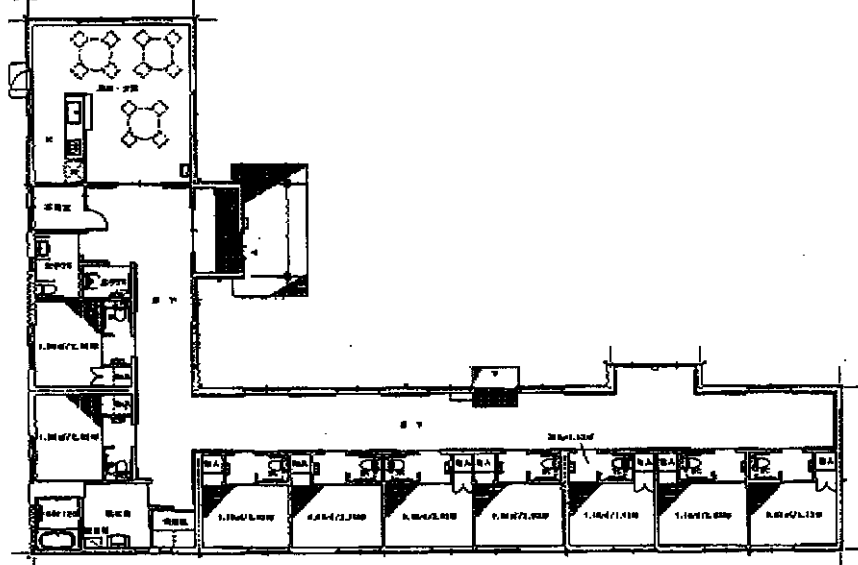


図3 デイサービスセンターとグループホーム合築施設平面図

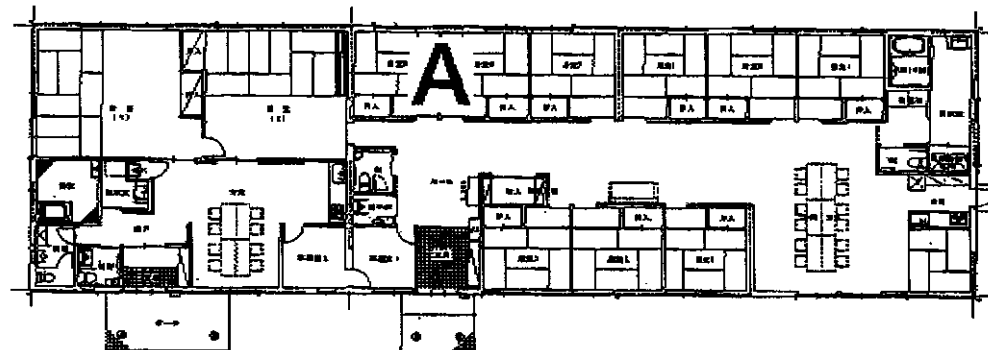
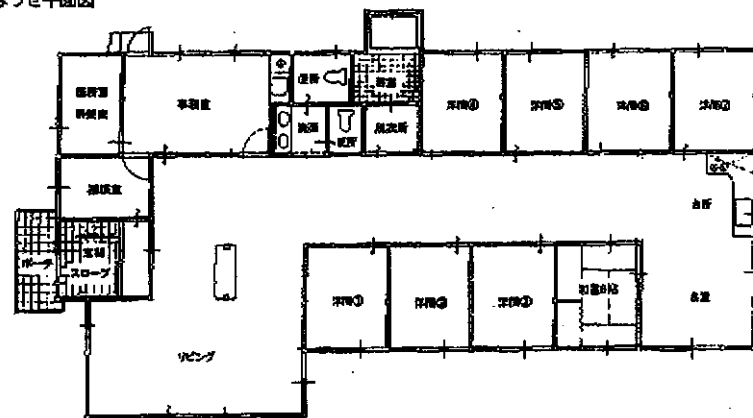


図4 きなっせ平面図





スタッフの肩をもんでくれる利用者。



なぜかガッツポーズ？



外出時の様子。

いっしょに1日を過ごすデイサービスを行う予定だ。

これらが新ホームのハード部分である。デイサービスで「通い」のサービスをカバーし、自主事業のグループホームと多目的ホームで「泊まり」と「居住」のサービスをカバーする。きなっせ本体からのヘルパー派遣では、「家にも来てくれる」サービスを行う。2つの建物とホームヘルプを組み合わせることで、「選んで、泊まれて、家にも来てくれて、いざとなったら住むことができる」という小規模多機能ホームを行おうというわけだ。

緊急の宿泊ニーズに 応えられる機能を持つ

実際には、こんな運営になる。

ポイントは、自主事業のグループホーム部分の運営だ。9部屋のうち7部屋を長期利用者用にして、残りの2部屋を短期利用者用にするのである。デイサービスセンターにも、2人くらい宿泊できるように内装をしつらえて、自主事業分のグループホームとデイサービスセンターを合わせて、4～5人の短期宿泊あるいは緊急宿泊に対応しようとしている。これによって、デイサービスから泊まり（ショートステイ）へ移行するときの急激な環境変化、人間関係の変化から、利用者を守ろうとしている。

現行の制度では、「デイサービス→ショートステイ→老人保健施設あるいは特別養護老人ホーム」といったように、利用するサービス

が変わるたびに、利用者は環境と人間関係の変化にさらされる。とくに痴呆をかかえた高齢者は、このような環境の変化に対応しづらい。そのために痴呆が悪化したり、身体状況が悪くなったりすることが多い。

きなっせの新ホームは、利用者を取りまく環境と人間関係を変えずに、「デイサービス→ショートステイ→老人保健施設あるいは特別養護老人ホーム」の流れに相当する「通って、泊まれて、家にも来てくれて、いざとなったら住むことができる」サービスを提供しようとしている。同じ環境やなじみの人間関係の中で、「デイサービス→ショートステイ→老人保健施設あるいは特別養護老人ホーム」に相当するサービスを提供することで、利用者の状態の変化をできるだけゆるやかにしようとしているのだ。

「在宅継続支援型」の ケアマネジメント体制

違いはそういったサービスの提供体制だけではない。

「デイサービス→ショートステイ→老人保健施設あるいは特別養護老人ホーム」の利用するサービスが移行していく中で、環境と人間関係が変わっていくと、利用者の状態が悪くなることが多い。そういったサービス提供の流れの中では、どうしてもケアマネジメントは「施設誘導型」になりがちになる。

とくにショートステイで、状態が悪くなる場合が多い。ショートステイ利用後、デイサ

ービスの利用回数が増えたり、特別養護老人ホームの利用になったりするのだ。利用するサービスが変わるたびに環境や人間関係が変わると、利用者は意図しなくても、自然と老人ホーム入居へ向かって進むことになってしまうのである。

きなっせの新ホームでは、ケアマネジメントを「施設誘導型」ではなく「在宅継続支援型」にしようとしている。

緊急宿泊・短期宿泊用の部屋を4～5人分用意するのも、そのためだ。せっかく新ホームのデイサービスを使って在宅生活を続けていたとしても、他施設のショートステイを利用して環境の変化によりお年寄りの状態が悪くなってしまえば、在宅生活の継続が不可能になってしまうかもしれない。ショートステイを利用しても在宅生活が続けられるような状態で利用者を家に帰すために、環境と人間関係が変わらない同じ施設の中でショートステイをするのである。もし他施設のショートステイを使ったらどういったことが起きるかを、充分想定してのマネジメントだ。

そのあたりのことを、きなっせ代表の川原秀夫代表はこんなふうに語っている。

「今、多くのグループホームが特別養護老人ホームのような大規模施設と同じケアを行っています。グループホームは本来、利用者の地域とのかかわりが大切にされるべきものだったのに、それがまったくないところが多いのです。きなっせでは、地域とのかかわりを大切にしたいケアを行ってまいりました。きなっせのスタッフとはあまり話をしない人が、散歩

の途中で昔からの顔なじみに会ったりすると、何十分も話をされるのです。きなっせのスタッフとはトンチンカンな話しかできない人が、地域の顔なじみと楽しそうに会話をする。こういうことが地域の力だと思えるんですね。そういったことを利用者が私たちに教えてくれました。

また、きなっせには近所の子供たちが遊びに来ることがあるんですが、子供が来るとお年寄りの表情に笑顔があふれます。きなっせのスタッフ以上の働きを近所の子供がしてくれるんです。これも地域の力の一つだと思います。でも、今のグループホームの多くは、そういったものを遮断してしまっています。ある老人保健施設併設のグループホームには、玄関に鍵がしまっていました。玄関の外にはフェンスがあり、そこにも鍵がかかっています。地域との交流ができるような施設ではないのです。お年寄りもグループホームの中に閉じ込められています。これでは閉じ込め型の特別養護老人ホームとなら変わりありません。そのスタッフからはこんな話を聞きました。「私たちにとって、このグループホームは老人保健施設の一部なんです。老健増築の許可はおりなかったのですが、グループホーム建設の許可はおりたんです。それでグループホームをつくったんです。グループホーム的なケアをしたかったわけではないんです」。施設の別棟という感覚ですね。

こういったケアをするグループホームが多くなっています。家との関係、地域との関係が断たれたグループホームは、本来のもの

ではないと思います。在宅生活を続けるためのグループホームを考えていったら、新ホームのようなものが必要なんじゃないでしょうか」

私自身も川原さんが見てきたようなグループホームの話が各地で聞く。実際にそういった施設を見たこともある。とくに、地域との関係がなく、閉鎖的なケアをするグループホームは多い。建物が小さくただで、特別養護老人ホーム同様のずさんなケアをしているところも多くある。グループホームが増えるにつれて、そういった話を聞く機会が増えてきた。

川原さんはこうも語る。

「福岡市中央区にある『宅老所よりあい』など、グループホームケアの先駆者たちは、特別養護老人ホームの流れ作業的なケアに対してのアンチテーゼをはっきりと持っていました。利用者中心の利用者の心によりケアをしようとしてきました。でも、今グループホームを行っている人たちの多くは、そういった目的を持っていません。従来の特別養護老人ホームのケアに対する反省もないので、これまでと同じようなずさんなケアをしてしまっています。運営も利用者中心ではなく、管理的になってしまいます。玄関に鍵をかけて閉じ込めるなんていうのは、その典型ですね。」

きなっせが利用者中心のケアを徹底していることを象徴する一つのエピソードがある。

きなっせがオープンしてしばらくのことだ。重度の痴呆で、強い被害妄想をもっているIさんが入居してきた。毎日、外出する。いわゆる徘徊である。朝食後、短いときは2〜3時

間。長いときには日が沈むまで10時間。しかも、ただ歩いているのではなく、他人の家に勝手にあがりこんでしまう。その家の食事などを勝手に食べたり、食事が出るまで居間に座り込んだり。家の人が注意すると、口答えをして喧嘩になる。ある家からは、「こんな人は閉じ込めてくれないと近所迷惑じゃない」と言われたりしたこともあった。スタッフはそのたびに平謝り。Iさんを家から出そうとすると、「人殺し」と大声で叫ばれる。

そんな状態が6カ月続いたある日、栗をむきながらIさんのケアをどうするか、スタッフ同士で話しあっていた。スタッフの意見はこんな感じだった。

「鍵をかけて閉じ込めよう」

「薬で抑えよう」

「精神科に入院してもらおう」

それを聞いていた川原さんは、栗をむいていた包丁をテーブルに突き刺すと、真っ赤な顔でこう叫んだ。

「そういった大変な人をケアできないようなら、これまでの特養と同じじゃないか。そんなことをするなら、きなっせは閉めてしまったほうがいい。きなっせは終わり！」

スタッフはその後もIさんの外出に付き合い、Iさんは少しずつ落ち着いていった。今では食器を拭いたりしてくれている。

他にもこんなケースがある。開設から約2年間のきなっせの取り組みをまとめた「よい小単位ケアとはなにか」（きなっせ編・筒井書房・改定版がまもなく発刊される）から紹介したい。



阿蘇に出かけた時のIコマ。



ケアがよくなると表情にも落ちつきがでてくる。



きなっせでは1人1人のペースを大切にケアしている。

「利用者の中で『もう限界』と思った方がいます。入居以来毎日『飛び出します』。窓からダイビングして、庭を横切り、フェンスを飛び越え、車の前に飛び出していきます。一刻も目が離せません。出るのをとめたりすれば、『アー』と奇声をあげ、ドアをドンドンと叩き続けます。真夜中も同じことをします。他の利用者は目をさましてしまいます。やっと眠ったと思うと「ジャー」という音。枕元に放尿です。毎日マンツーマンで外出しました。ドライブしたり、散歩したり、夜は添い寝をします。2か月間続けてやっと落ち着いてきました。精神科に長期入院していて、閉じ込められていた反動だったのでしょうか。常にそばに安心できる人がいることで、凍った心が溶けてきました。かわいいおばあちゃんに変わりました。「大好きですよ、Oさん。」

川原さんの話に出た福岡市中央区の「宅者所よりあい」などもそうだが、先駆的なグループホームケアを行ってきた小規模多機能ホームは、このようなケアを行ってきたのだ。それをベースに、さらに地域とのつながりを深めようとしているのである。

家族と地域の安心感を高めるサービスを提供する

きなっせの新ホームが、デイサービスセンターと自主事業のグループホームで、緊急宿泊・短期宿泊に対応しようとしている理由は、利用者を環境の変化から守るためだけではない。利用者の家族や地域住民に安心してもら

い、それによって利用者の在宅生活が少しでも長くなることをも目的としている。

「地域住民は、利用者にとって両刃の剣なんです。利用者を支えてくれるのも地域住民ですし、『痴呆のお年寄りが一人暮らしでは火事になったりするかもしれないから施設に入って欲しい』といった感じで、地域から利用者を排除するのも地域住民です。排除するのではなくて、支えてくれる地域住民を増やさなくてはなりません。そのためには地域を耕すというか、地域住民の理解を深めていくことが必要です」

きなっせの川原さんは、そう説明する。

具体的には、①家族の安心感、②地域住民の安心感を2つを高めていくことが必要になってくるだろう。

まず、家族の安心感は、24時間365日の対応で高めようとしている。家族は急にお年寄りを預かってもらいたいときがある。そんなときに、緊急宿泊・短期宿泊で対応する。もし、対応できなければ、家族はこんなふうにかえるかもしれない。

「やっぱり家で面倒を見るのはむずかしい。施設に預けよう」

24時間365日、どんなときでも対応することで、「何かあれば新ホームがあるから安心」と家族に思ってもらえることを目指している。そのためには、緊急宿泊・短期宿泊につねに応えられることがポイントになってくるのである。「何かあったときに困る」のか「何かあっても安心」なのかが、家族が利用者を施設に預けようとするかしないかの分かれ目にな

るのではないか。川原さんたちはそう考えている。

地域の安心感を高めることも、同じことがポイントになってくる。「何かあったときに困る」から、地域に住まわずに施設に行って欲しいのか、「何かあっても安心」だから、地域に住んでいてもかまわない、となるのかである。

新ホームには、地域住民の理解を深めるため、地域サポートセンターを設置する予定だ。地元の商店街との連携や地域住民との交流を積極的にはかろうとしている。これは利用者の「在宅継続支援型」のケアマネジメントの一環と見ることもできるし、ソーシャルワーク、コミュニティワークの一環と見ることもできる。サービス提供施設が、ソーシャルワーク、コミュニティワークにまで力を入れようとしているのである。

きなっせの新ホームのポイントをまとめる以下ようになる。

■小規模多機能ホームで、「通って、泊まれて、家にも来てくれて、いざとなったら住むことができる」サービスを提供。

■「施設誘導型」のケアマネジメントではなく、「在宅継続支援型」のケアマネジメント。

■利用者の家族と地域住民の安心感を高めるコミュニティワーク。

この3つが、利用者が地域に少しでも長く住み残るために必要とされているのではないだろうか。■

資料

コレクティブホームいつでんどこでん

山鹿市の東部地区(古閑)に平成15年3月21日にオープン

地域のニーズに決してNOとしない地域サポートセンターを核に、介護保険及び支援費の事業とNPO独自の事業を3つのテーマを持って展開する。(介護保険、支援費の事業は指定を受けて実施)

3つのテーマ

- ① 利用者の自宅で、地域の中で暮らしたいとの希望より、施設のほうが安心だとの「施設指向」を、地域の中でも安心して暮らせるものへと転換するために地域サポートセンターを核に、安心・安全の支援とその受け皿を整備する。
地域のニーズに決してNOとしない。
- ② 痴呆の人を最初からターミナルまで継続してケアできるように、通って・泊まって・家にも出向いて・住むこともできる、小規模多機能のサービスを提供する。内容は、現在のグループホームが地域から閉ざされ「施設化」している中で、非指定のグループホームを、併設の通って泊まれるディサービスとあわせて、緊急時には活用できるものとして、レスパイト機能を持たせ運営する。
- ③ これまでの福祉は、児童は児童、障害者は障害者、老人は老人と縦割りされていたが、「富山方式」といわれるように地域の中で共に生きることがめざされるようになった。ノーマリゼーションの社会、地域で共生する場を創っていく。

提供するサービス

- ① 介護保険でのディサービス(定員15名)
- ② 介護保険での訪問介護
- ③ 支援費での訪問介護
- ④ NPOの独自事業として 住い(7名×2棟)
- ⑤ // 非指定ディサービス(子どもからお年寄りまで)
- ⑥ // ナイトケア
- ⑦ // レスパイト(2棟に各々2部屋確保)
- ⑧ // 地域サポートセンター
- ⑨ // 食事サービス(食堂・喫茶店・配食)
- ⑩ // 子育て支援
- ⑪ // 学童保育等

*介護保険での居宅介護支援事業は、きなっせ(熊本市小糸山町)で対応

[小規模多機能ホーム+共生+地域サポート]

イメージ図

地域の中で普通に暮らす

